

三十歳のころ

Tsujimoto Keijun
辻本敬順



◆ 目次 ◆

三十歳のころ	2
お釈迦さまの三十歳のころ	3
三蔵法師の三十歳のころ	10
親鸞聖人の三十歳のころ	17
九條武子夫人の三十歳のころ	22
私とあなたの三十歳のころ	28

※本文中『註釈版聖典』の引用は「第二版」を用いています。

© Uden Graham/Redlink/amanaimages

三十歳のころ

「なぜ、三十歳なのですか？」

このタイトルをご覧になった方は疑問を持たれたかもしれませんが。

「どうしても三十歳でなければ……」といった意味はありません。

しかし、三十歳での行いを「三十路（みそじ）の風景」といいますし、孔子は『論語』で「三十歳にして立つ」といいます。三十歳になって独立した立場を持つことでしょう。

親鸞聖人は二十九歳のときに百日間、六角堂に参籠され「雑行を棄てて本願に帰す」と比叡山を下りられました。聖人の心の大転換だったと思います。このことが、私なりに三十歳頃へのこだわりが生まれ、親鸞聖人だけでなく、皆さんご存じの「お釈迦さま」「三蔵法師玄奘」「九條武子夫人」の

三十歳ごろの風景を並べてみました。

皆さんの三十歳と比べてお読みください。

お釈迦さまの三十歳のころ

今からおよそ二千五百年の昔。

マガダ国のビンビサーラ王は、王舎城の宮殿の高殿に立って、道行く人びとを眺めていた。王舎城はマガダ国の首都で、インド第一の繁華な都市だったから、その街道には多くの人びとが往来していた。

「お前たち、この人を見よ」

ビンビサーラ王は一人の青年修行僧に目を止めた。

「美しく、大きく、清らかで、上品である。使者を遣わせて、この修行僧

がどこへ行くのか、見届けさせよ」

この修行僧こそ、二十九歳で出家して、托鉢たくはつのためにこの街にやって来た
ゴータマ・シツダルタ（後のお釈迦さま）であった。

*

*

シツダルタはスッドーダナ王（浄飯王）とマーヤー夫人（摩耶夫人）との
王子として、カピラ城に誕生した。

誕生の七日後、生母マーヤー夫人が亡くなるという不幸にあったが、夫人
の妹マハーパジャーパティーが養母となって教育し、王子は人びとの愛情と
期待の中で、すくすくと成長していく。

やがて、多くの先生がたがカピラ城に招かれる。

王子はその先生がたについて、王族の教育として必要な学問、技芸や武術

などを学んだが、どの分野においても非凡な才能を発揮したという。

王子は太子となった。

シツダルタ太子は後年、自分の青年時代の生活について回想する。

「私の住まいにはあちこちに蓮池があり、私を喜ばすために青や赤や白い
睡蓮すいれんや蓮が植えてあった。私はよい香りの梅檀香せんたんこう以外は用いないし、衣類は
すべてカーシー産の軽いりっぱな絹のものだけを身につけた。

私が邸内を散歩するときには、夜も昼も白い傘がさしかけられ、これが暑
さ寒さを防ぎ、雨露をしのぎ、塵やほこりを防いでくれた。

また、私のために、冬と夏と雨期に適した三つの宮殿が建てられた。私は
雨期の四カ月間は、雨期に適した宮殿で、美女たちだけで奏でるいろいろな
歌舞かぶわんぎょく音楽を楽しみ、宮殿から下りることはなかった」

太子の回想は続く。